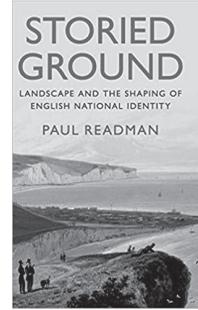


書評

Paul Readman, *Storied Ground: Landscape and the Shaping of English National Identity*
(Cambridge UP, 2018)



加藤 匠

エリザベス・ギヤスケルの代表作『北と南』のヒロインであるマーガレット・ヘイルにとって、彼女が住んでいたハンプシャー州にあるニューフォレストは誰でも出入りできる共有地があり、彼女にとってはまさに落ち着きや自由を感じさせてくれる場所であった。しかし彼女は父親が牧師を辞任したことで、工業都市ミルトンへの移動を余儀なくされる。彼女が初めて見たミルトンは汚さや醜さが支配し、息が詰まるようなディストピアであった。このミルトンが産業革命の影響で紡績業が発達した工業都市マンチェスターをモデルとしていることは周知の事実だが、ここで対極に位置づけられているマンチェスターとニューフォレストが共に＜イングランドを象徴する財産＞として認識されていたと本書が指摘していることを知ったら、意外に思う読者も少なくないかもしれない。というのも、川崎寿彦の名著『森のイングランド』にあるように、イングランドで従来最も価値が置かれ、その象徴的風景とされてきたのが、古き良きイングランドを想起させる、絵画的な小さな田舎風の邸宅や風で揺れる農地があるようなイングランド南部の田園風景であり、工業都市はその対極に位置する＜反イングランド的なもの＞と解釈されてきたからなのだが、筆者ポール・リードマンはそうした従来の見解からは抜け落ちてしまう場所を取り上げ、興味深い新たな視座を提示してくれている。

リードマンが選んだのは、1780年頃から第一次世界大戦の始まる1914年までという、リードマンが言うところの「長い十九世紀」——産業化や民主化が進み、マスメディアや通信・交通手段が大きく発達した時代——を通じて、イングランドの六つの土地における景観や環境に対する姿勢の

変化を踏まえながら、イングランドの景観が国民としてのアイデンティティ形成に寄与した多様な方法を追究したものである。彼はドーヴァーの白い崖とノーサンバーランドの荒野という「国境地帯」、「環境保護運動」が盛んに行なわれた湖水地方とニューフォレスト、「イングランド南部以外の場所」で国民としてのアイデンティティ形成に貢献したマンチェスターとテムズ川という、イングランド南部の田園風景とはかけ離れた六つの場所を選び、景観が持つ文化・歴史的な意義ゆえに持つことになる「連想価」に焦点を当て、それが国民としてのアイデンティティ形成にいかに関与したのかを論じていく。書名になっている“*Storied Ground*”とは、まさに歴史や文化をめぐるナラティブを持つが故に価値を持つ土地を指しているのである。

第一部「国境地帯」で取り上げられているのは、隣国との接点に位置することからナショナリスト的な言説が飛び交い、国民のアイデンティティが最も形成されやすい場と言える国境地帯にある二つの場所である。第一章で取り上げられるのは、ドーヴァー海峡の白い崖だ。ここが単なる外観以上の意味合いを持つことは、リードマンが引用した当時のガイドブックにある「イングランド人であれば、ドーヴァー城と白い崖を見たら必ずその歴史、力強さ、美しさに対する誇りと満足を感じるはずだ」というナショナリズムの言説からも明らかだろう。筆者が指摘するように、十八世紀末以降、白い崖は外部からの侵略に対する強固な防御——その防御力を強調するために、J・M・W・ターナーは実際よりも高く描いたという事実も紹介されている——だけでなく、出入国時に島国である祖国を改めて意識し、イングランド人というアイデンティティを掻き立てられる場であった。十八世紀半ばまではそれほど注目を集めてはいなかったこの白い崖をめぐる言説の流れ——ウィリアム・ギルピン、メアリ・ウルストンクラフトからヘンリー・スタンレーまでが取り上げられている——からターナーの絵画表象までをリードマンが丹念に追っている箇所は、非常に読み応えがあるものとなっている。

第二章で取り上げられるのは、イングランドとスコットランドの国境地帯ノーサンバーランドの荒野である。大量の血が流された戦場の痕跡、廃墟となった城跡、勇敢な武勇伝や悲劇的な死、戦争などを歌ったバラッドといった中世以降の両国の対立の歴史を示すものに満ちた場所から生まれ

るイングランド人というアイデンティティが、イングランド南部の田園風景から生まれるものとはかけ離れたものであることは自明であろう。このノーサンバーランドの荒野が持つこうした文化・歴史的な側面は、ピクチャレスク美学が支配していた時代には見向きもされなかったが、十九世紀半ばになって漸く評価されるようになった。その最大の貢献者が、文化・歴史的な側面から刺激を受けた作品を数多く残し、バラッドのアンソロジーの編纂まで行なったウォルター・スコットだと筆者は指摘する。彼の影響力は1890年代まで持続し、ノーサンバーランドに観光客を呼び込んだだけでなく、当時の人々の感性に影響を与え、観光客たちは既に廃墟となった城跡を訪れて過去に想いを致すだけでなく、そこに歴史的な意味を付与することで現在を肯定したとされるのだ。戦闘の痕跡は今や統一されたひとつの国家となったイングランド、スコットランド双方が誇りを持って振り返ることのできる場として再想像され、それが「イギリス人」という新たなアイデンティティが作られるのに貢献したものとリードマンは結論付ける。彼は「イングランド」への帰属意識が「イギリス」への帰属意識に当然つながるとして、「イングランド」への帰属意識を中心に論じているだけに、この箇所は「イギリス」が前景化する本書では数少ない事例である。つまり、彼の視座から抜け落ちたスコットランドのハイランド地方のような場所が本書の主張とどうリンクするかは、読者への宿題として残されているのだ。

第二部「環境保護運動」で取り上げられるのは、過去との繋がりやあらゆる階層の国民にとっての財産と見なされたが故にその土地が尊重されるようになり、ナショナル・トラストのような景観を保護しようとする運動が起こった土地である。第三章で取り上げられているのは、鉄道網の発達もあり、既にヴィクトリア朝期にはイングランド屈指の景観を誇る国民的観光地となっていた湖水地方である。湖水地方が何故ここまで人々を惹きつけたのか、リードマンは当時刊行されたガイドブックを引用しながら「景観の美しさ」と「湖水地方が持つ歴史性」というふたつの要因を指摘する。ピクチャレスク概念から湖水地方の崇高な美を称賛したウィリアム・ギルピン、湖水地方を謳った詩や『湖水地方案内』を通じて、湖水地方の歴史的側面に焦点を当てたウィリアム・ワーズワースらが次々と言及される中で、次第に湖水地方が「イングランドにとっての国民的財産」と

して認識されるようになり、景観を損なうような開発から保護すべきという機運が高まったことが指摘されるのである。特に筆者が注目するのが1880年代以降見られるようになった地域開発や歩道から人々を締め出そうとする地主に対する反対運動で、「イングランドにとっての国民的財産」という観点から反論がなされ、それがナショナル・トラストに繋がったことが当時の文献を引きながら丁寧に論じられている。こうした動きが湖水地方のイメージを高め、国家のアイデンティティと深く結びついた湖水地方のイメージを確立したとされるのである。

同様の流れは、ニューフォレストを題材とした事例研究である第四章でも読み取ることが出来る。王領地にあり、元々狩猟も盛んに行なわれていた場所なのだが、十七世紀後半からは海軍で用いられるオークの供給源としての役割が強調され、生産性を増やすために囲い込みも行なわれた森林である。囲い込みで牧草地を奪われる形となった地元民からの反発を招いた結果、1877年のニューフォレスト法でそれ以降の囲い込みが禁止されたことを受けて、人々に息抜きを与えるニューフォレストの共有地を保護しようという動きが起こるようになると、鉄道網の整備もあって、郊外に住む中産階級の観光客が美しい景観を求めて訪れるようになった。政治権力が中産階級に移ったこと、都市化が進んだこと、観光業が発達したこと、環境遺産に関する人々の意識が変化したことなどが背景となって、ニューフォレストはイングランドを代表する遺産としての地位を得るのだが、特に人々の景観をめぐる意識の変化について、筆者が様々な資料を駆使しながら論じる興味深い章と言えるだろう。

第三部「イングランド南部以外の場所」で取り上げられるのは、従来の<イングランド=田園>というイメージの対極にある、都市の景観とアイデンティティをめぐる議論である。第五章で扱われるのは、冒頭でも述べた『北と南』の舞台のひとつマンチェスターなのだが、実際にはマンチェスターのイメージはディストピアどころか遥かに肯定的なものが支配的だったことが数々の資料を通じて論証されている。当時の人々にとって、マンチェスターが生み出す富は強い誇りを感じさせるものであったし、特に街の景観は国にとってのマンチェスターの意義を人々に痛感させるものであり、愛国的な誇りを感じさせるものでもあったのだ。実際マンチェスター

では紡績工場、倉庫、独特な建物、人々で賑わう通りといった街の景観は観光の目玉として機能しており、ギヤスケルは遠方から訪れた知人を友人が経営する鋳物工場の見学に誘っていたという。こうした風潮は産業革命の負の側面が明らかになった後も変わることはなく、トマス・カーライルが述べているように、マンチェスターの工場に崇高さを感じる人々もいたことが指摘されている。マンチェスターに対する誇りは最終的にはイングランド中に伝播していったが、ひとつの地域に根差したアイデンティティ意識が国民のアイデンティティ意識へと昇華しようということを、マンチェスターの事例研究は雄弁に物語っている。

第六章で取り上げられるのは、テムズ川流域である。元々テムズ川はドーヴァーの白い崖同様、愛国的なイギリスらしさと強く結びつくものではあるが、リードマンの議論においてテムズ川が意義を持つのは、上流域は従来のイングランドが持つイメージとリンクするような田園地帯であり、古き良きイングランドが今尚生き続けていることを象徴する一方で、下流域は大英帝国の中心たるロンドンの繁栄を象徴するような光景が広がっているためである。過去のイングランドに対する憧憬と現在のイングランドの繁栄に対する誇りとを体現したテムズ川は、二重の意味で国民のアイデンティティ意識を高める存在だったのだ。リードマンがしみじみ指摘するように、テムズ川を源流から北海まで辿る流れは、イングランドの田園と都市を結ぶだけでなく、まるでタイムマシンのように、過去と現在、そして未来を辿る流れでもあったのである。

それぞれの章の連関は強くはないので、どこか特定の章を読むだけでも多くを学べる興味深い本であることは確かなのだが、それでも不満を感じる部分がないわけではない。特に気になるのは、「非常に長い十九世紀」を語るうえで避けては通れないはずの大英帝国の存在が完全に消されている点だろう。ドーヴァーの白い崖を論じた箇所ですら辛うじて大英帝国について言及がなされるものの、白い崖はあくまでも海峡を隔てたヨーロッパ諸国、特にフランスとの関係で論ずるべきものであり、故郷を思い出す内向きのベクトルを持つものとして、帝国はすぐに片づけられてしまう。確かに常日頃から帝国を意識していることはないかもしれないが、ふとしたきっかけから「大英帝国の一員」というアイデンティティを意識すること

だっており得るはずだ。帝国と歴史的繋がりを持つリヴァプールのような場所であれば、帝国に関する物語を持っていることは十分に考えうるし、そもそも環境保護活動が起こるほどの豊かな自然を守ることが出来た背景として、大英帝国の存在を無視することは出来ないはずだ。またテムズ川が扱われているとはいえ、大英帝国との繋がりはずぐに否定されてしまい、イングランドで最も歴史や文化をめぐる様々なナラティブを持つ——その中には、当然大英帝国に関するものも含まれる——都市ロンドンについてはほぼ論じられていないのである。

しかし本書の最大の魅力は、何といても、その情報量の多さということになるだろう。雑誌や新聞から文学作品、議会の調査記録、そしてガイドブックに至るまで当時の様々な文献が豊富に引用されたかと思えば、ターナーをはじめとする四十点の図版が取り上げられるだけでなく、ノーサンバーランドで作られたバラッドから訛り、当地のゴシック建築についても次々と論じられ、当時の中産階級の生活を読者に追体験させるような豊潤な世界が構築されている。だからこそ、歴史を扱った論文であるにも関わらず、Selected Bibliographyしかないのが惜しまれる。

『北と南』の結末で、マーガレットはニューフォレストに対する愛着を持ちながらも、ミルトンで出会った工場主ジョン・ソーントンと結婚し、ミルトンに留まることを選択するが、これはまさに当時の人々の心情を体現しているとリードマンは指摘する。人々は田園風景に愛着を抱きながらも、マンチェスターのような変化や進化を体現する工業都市にも同時に魅かれたのだが、国民のアイデンティティがそうした工業都市の影響からも確かに形成されていたことを、この本は見事に論じている。

——明治大学非常勤講師